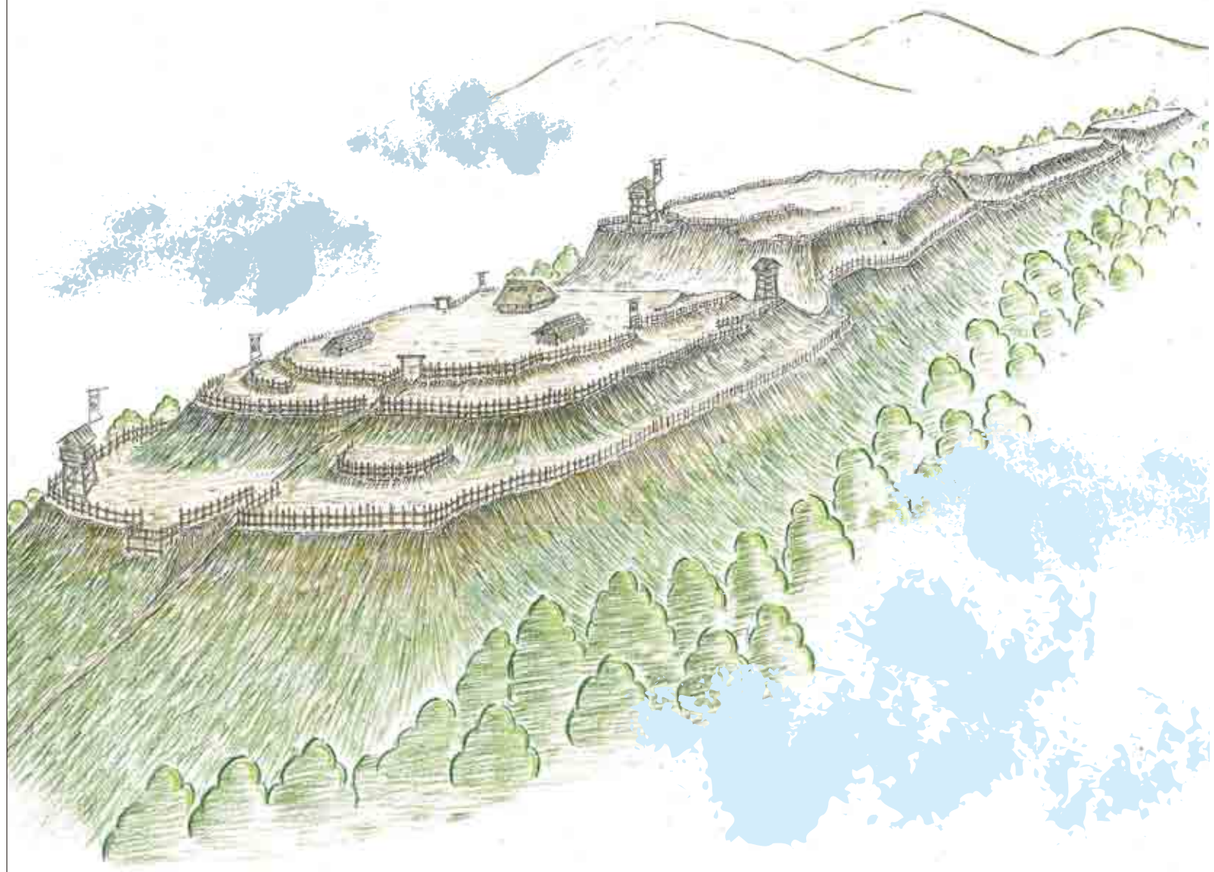


茨城県常陸大宮市鷲子

美和の中世城郭

河内城

こうとじょう

河内城向館

こうとじょうむかいだて

鷲子宿

とりのこしゅく

森と地域の調和を考える会（木の駅プロジェクト美和実行委員会）

常陸大宮市ふるさと文化で人と地域を元気にする事業実行委員会

文化庁 平成28年度文化遺産を活かした地域活性化事業

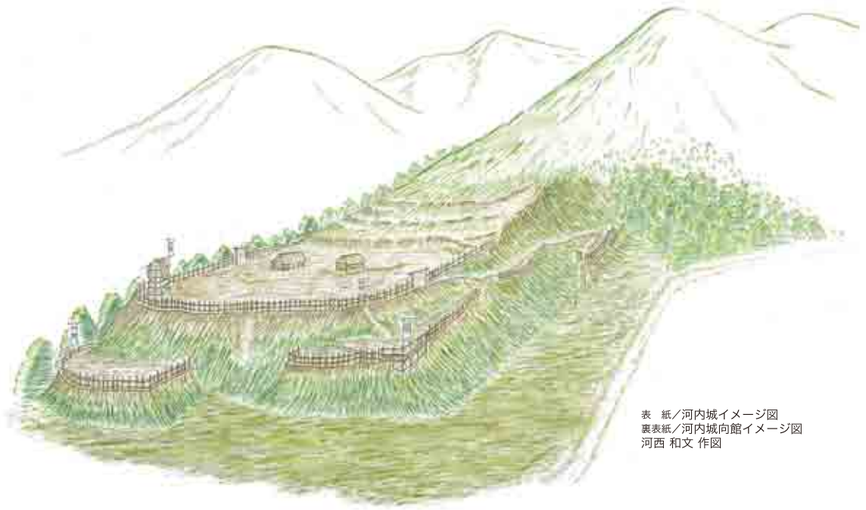


表　紙／河内城イメージ図
裏表紙／河内城向館イメージ図
河西 和文 作図

『美和の中世城郭–河内城・河内城向館・鷲子宿』

発　　行　森と地域の調和を考える会（代表 龍崎 眞一）
編　　集　山川 千博（茨城大学中世史研究会）
　　須貝 慎吾（茨城大学中世史研究会）
図版協力　河西 和文（森と地域の調和を考える会）
　　桟敷 二郎
デザイン　大高 泰弘（森と地域の調和を考える会）
発 行 日　2017年3月1日

美和の中世城郭
河内城（こうとじょう） 河内城向館（むかいだて） 鷲子宿（とりのこしゅく）

一、はじめに

近年、常陸大宮市美和地域（旧美和村域）では、市民を中心に「森と地域の調和を考える会」が発足し、常陸大宮市教育委員会や茨城大学中世史研究会の協力を得て、地域に所在する中世城郭を活用するための、整備事業を進めています。

すでに平成二六・七年度には、高部地区に所在する高部館・高部向館の草刈り整備を行い、あらためて縄張調査を実施したところ、長いあいだ草に埋もれていた地表面遺構が姿を現し、城郭の全体像が浮かび上がりました。そして高部地区を、本城（高部館）のほかに出城（高部向館）・根小屋（城主や家臣団の空間）・宿（城下）・河川（惣構）までもが一体で残り、戦国時代の雰囲気を体感できる魅力ある地域として紹介しました〔山川編　二〇一六〕。

今年度は、高部地区の西方約四㎞に位置する、鷲子地区の河内城・河内城向館を対象に、同様の事業に取り組んでいます。そして、この鷲子地区においても、本城と向館、および根小屋・宿・河川等が、一体の防御構造を成していたことが明らかになりつつあります。

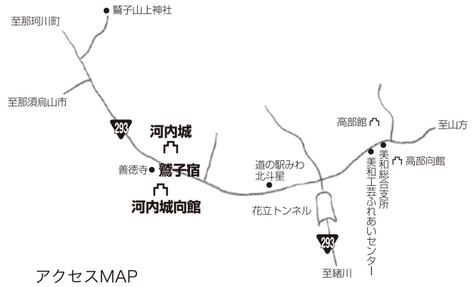
なおこの事業は、「常陸大宮市ふるさと文化で人と地域を元気にする事業実行委員会」が主催する、「文化庁平成二八年度文化遺産を活かした地域活性化事業」の一環でもあり、本書はその報告書として刊行するものです。

本書の構成は以下の通りです。

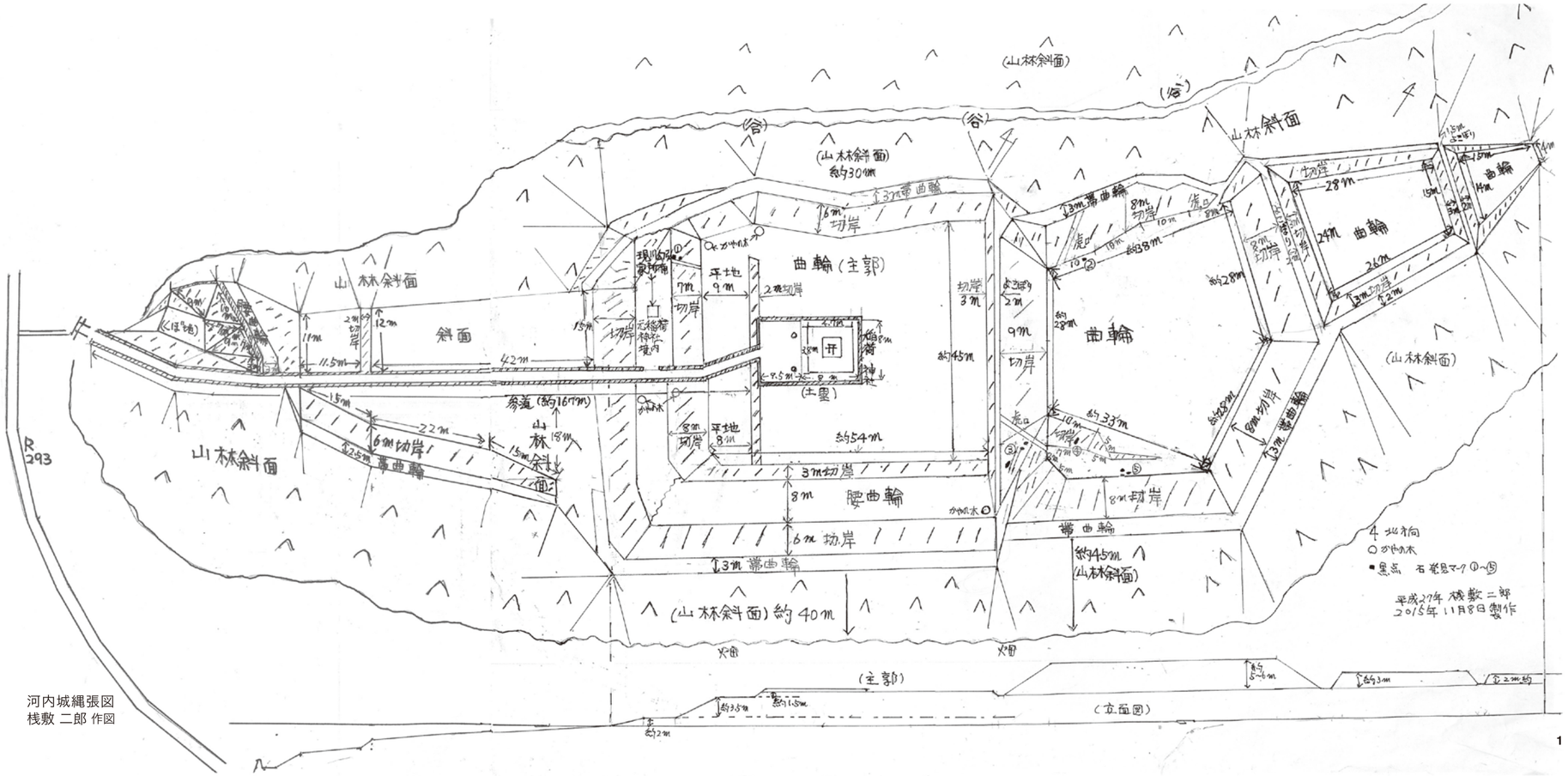
一、はじめに……1頁
二、城主鷲子江戸氏について……3頁
三、河内城・河内城向館の構造……5頁
四、鷲子宿と周辺の文化遺産……8頁
五、「森と地域の調和を考える会」の取り組み……10頁

執筆は一・三を山川千博（茨城大学中世史研究会）、二・四を須貝慎吾（同）、五を龍崎眞一（森と地域の調和を考える会）が分担しました。

河内城・河内城向館の整備風景



アクセスMAP



河内城縄張図
桟敷 二郎 作図

二、城主鷲子江戸氏について

河内城は別名鷲子城とも呼ばれ、鷲子江戸氏が城主であったと伝わります。江戸氏の祖は藤原秀郷流の那珂氏とされます。那珂通辰が建武三年（一三三六）の瓜連合戦で北朝方に敗れ、子通泰のみを残して族滅し、後に通泰が江戸氏の祖になりました。その後、江戸氏は下江戸（那珂市）から河和田城（水戸市）へと移り、応永年間（一三九四―一四二七）末頃には江戸通房が大掾氏を攻め、水戸城を手に入れます。通房には通秀の他に六人の子がいて、そのうち次男の通治が隠岐守を名乗り、この地に移り鷲子江戸氏の祖になったとされます〔藤木　一九七七〕。その詳しい時期は不明ですが、概ね一五世紀中期ごろと思われ、河内城もこの頃に築かれたと考えられます。

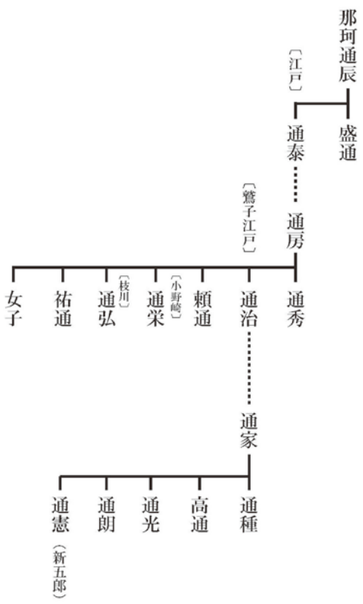
一六世紀初頭、常陸国内で長年続いた内乱を克服した佐竹氏が、那須方面に進出します。那須氏と抗争中の天文年間（一五三二―五四）、佐竹義篤は烏山（からすやま）方面への出兵に際し、近隣の高部・小舟・桧沢等の地域で、それぞれ「衆」という住民を含めた軍事組織を編成し、戦に動員しました（「大縄文書」）。この史料に鷲子や河内城の名は見られませんが、下野国との国境に位置するこの地域において、佐竹氏領の境目を守るため、また下野進出の足がかりとして、鷲子江戸氏の居城である河内城が、佐竹氏の前線基地として軍事利用された可能性は高いでしょう。

もともと通房段階における江戸氏領の中心は、中妻三十三郷と呼ばれる地域でした。その領域は水戸・内原周辺から、北端は小場（常陸大宮市）までとされています〔南　一九九六〕。鷲子は本家の所領から遠く、地理的環境から鷲子江戸氏は独自に佐竹氏との結びつきを強め、その家臣団に組み込まれたと考えられます。

鷲子江戸氏は、国境を越え下野側の領主とも関係を結びました。常陸・下野間の国境にあたる鷲子山上（さんしょう）神社の棟札によれば、天文二一年（一五五二）の社殿再興に際し、鷲子江戸氏は下野国那須郡武茂（むも）郷（那珂川町）の領主武茂氏とともに社殿を造営しており〔梅田　二〇一〇〕、両者は国境を越えた信仰上の交流があったことがわかっています。また、武茂氏は宇都宮氏の分流ですが、永禄年間（一五五八―七〇）の初めころからは、佐竹氏に従い那須氏攻略にも加わっています〔小野　一九九三〕。鷲子江戸氏とはともに佐竹方として立場を同じくしており、両者は軍事的な連帯をしていたと考えられます。

鷲子江戸氏は、天正一九年（一五九一）に佐竹氏が江戸氏本家を水戸城に攻めた際にも、その影響を受けることなく佐竹氏家臣として存続しています。翌文禄元年（一五九二）の朝鮮出兵には、江戸隠岐守・上野介・通憲（新五郎）などが佐竹義宣に従い朝鮮へ派遣されています〔藤木　一九七七〕。また慶長七年（一六〇二）の佐竹氏の秋田移封にも従い、義宣と共に鷲子江戸氏も秋田へ移りました。

現在、鷲子宿の外れには文化六年（一八〇九）に刻まれた通憲の墓碑が残ります（左下写真・史料）。その碑文によると、秋田移封に従った通憲は、秋田での環境に慣れず病に伏したため、住み慣れたこの地に戻り、旧臣である小林重広・広義等に養われ、寛永一九年（一六四二）に没したと伝わります。



鷲子江戸氏略系図
（藤木 1977・南 1996・高橋 2009 を参考に作成）

江戸通憲（新五郎）墓碑銘（高橋二〇〇九より）

故江戸新五郎　墓

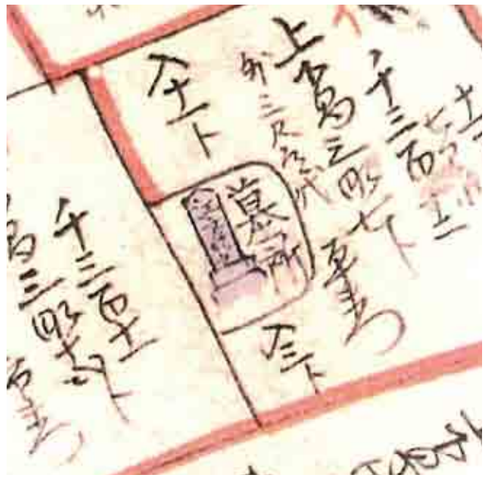
君諱通憲称新五郎、江戸氏祖諱通種称上野介、水戸城主江戸但馬守（通房）第二子也、居那珂郡、鷲子城主上野介通家、通家君娶松野氏生五子、長左衛門通種・主馬介高通・作兵衛通光・作左衛門通朗、君於次爲第二皆仕佐竹候、慶長七年佐竹候移封秋田、兄弟皆従君在秋田、多病不能仕事遂辞還郷里、居鷲子村族臣小林若狭重広之家、重広及子隼人広義奉之益謹、寛永十八年藩府命吏検封内田畝之数、賞重広父子節儀、没君之世勿収其田祖、君優游卒歳終於広義之家、十九年九月十一日也、法諡日喜菴、葬之所賜田間、土人命日殿畠、広義四世孫広高哀君没無後至秋田告之、君之親族那珂通実共議立石於君墓、勒其名氏且記卒年月及世次、未及刻而広高没、爾来因循未果其事、通実則長左衛門君五世孫也、広高予曾祖考也、予憾其碑無文、乃拠先人所記、重修勒之碑陰、以終祖考之志云爾、

文化六年己巳九月　　小林広安識

水戸医官　村田隆民　禎書

鷲子山上神社棟札
鷲子山上神社蔵、画像提供：常陸大宮市文書館

江戸新五郎墓



江戸新五郎の墓所（「鷲子村絵図」部分）
原島俊人　画像提供：常陸大宮市文書館

三、河内城・河内城向館の構造

河内城の構造

鷲子江戸氏の居城河内城は、鷲子方面から緒川沿いに烏山（那須烏山市）や武茂（那珂川町）へと抜ける幹線道路（馬頭街道）沿いの、標高約二七〇ｍの尾根上に所在します。現在、国道二九三号線を西走し、鷲子宿を通過する途中、右手頭上に見える稲荷神社の境内が城跡です（写真①）。

城内は、Ⅰ～Ⅳまで大きく四つのエリアに分かれます（以下、左頁縄張図参照）。Ⅰが城内最高所で、最も重要な曲輪（防御された平場）である主郭（本丸）にあたります。Ⅰはやや不整形な五角形をしており、北辺にのみ土塁がみられます（写真②）。土塁の切れ目には虎口（曲輪の出入口、図中Ａ）があり、その外側に小さな枡形空間を持つのが特徴的です。また、Ⅰの南部にも虎口（写真③、図中Ｂ）が見られ、本来はⅡの土塁上との間に木橋が架けられていた可能性があります。またその東側下には、通路状の帯曲輪が附属しています。

Ⅰの北東方向には小規模な曲輪群Ⅲがあり、北東の尾根伝いに敵が侵入するのを阻みます。Ⅲから見る、Ⅰとの間の堀切および切岸（人工的に削った斜面）は圧巻です（写真④・⑤）。

一方、Ⅰの南西側には、堀を隔ててⅡがあります（写真⑥）。Ⅱは三段の曲輪から成り、上段の稲荷神社が建つ曲輪が中心で（写真⑦）、一段下の曲輪にＬ字に囲まれます。その南側斜面には通路状の帯曲輪が見られ、Ⅰの直下で行き止まるため、Ⅱ南西部の竪堀（図中Ｃ）から侵入した敵を誘導するための道だと思われます。また、Ⅱの北辺下には長大な横堀が掘られ（写真⑧）、その両端は竪堀へと繋がります。とくに横堀の西端からその下部にかけての遺構（図中Ｄ）は見応えがあり、竪堀と上部の土塁・堀との複雑な組み合わせで、北の沢から侵入した敵の動きを限定し、どこに進んでも堀底に誘導する複雑な仕掛けを備えています。

また、Ⅱの西側のなだらかに下る尾根をⅣとします。Ⅳに明確な曲輪面は確認できませんが、周囲の斜面には切岸や通路状遺構がみられるため、城域とすべきでしょう。この付近に、字「祢古屋」と結節する登城ルートがあったはずですが、現状では不明です。

宿に向けて河内城の尾根や斜面がせり出す様子は、まるで、街道を塞ぐ大きな壁のようにも見え（写真①）、宿を囲み蛇行する緒川とともに、城下・鷲子宿を守る構造となっています。

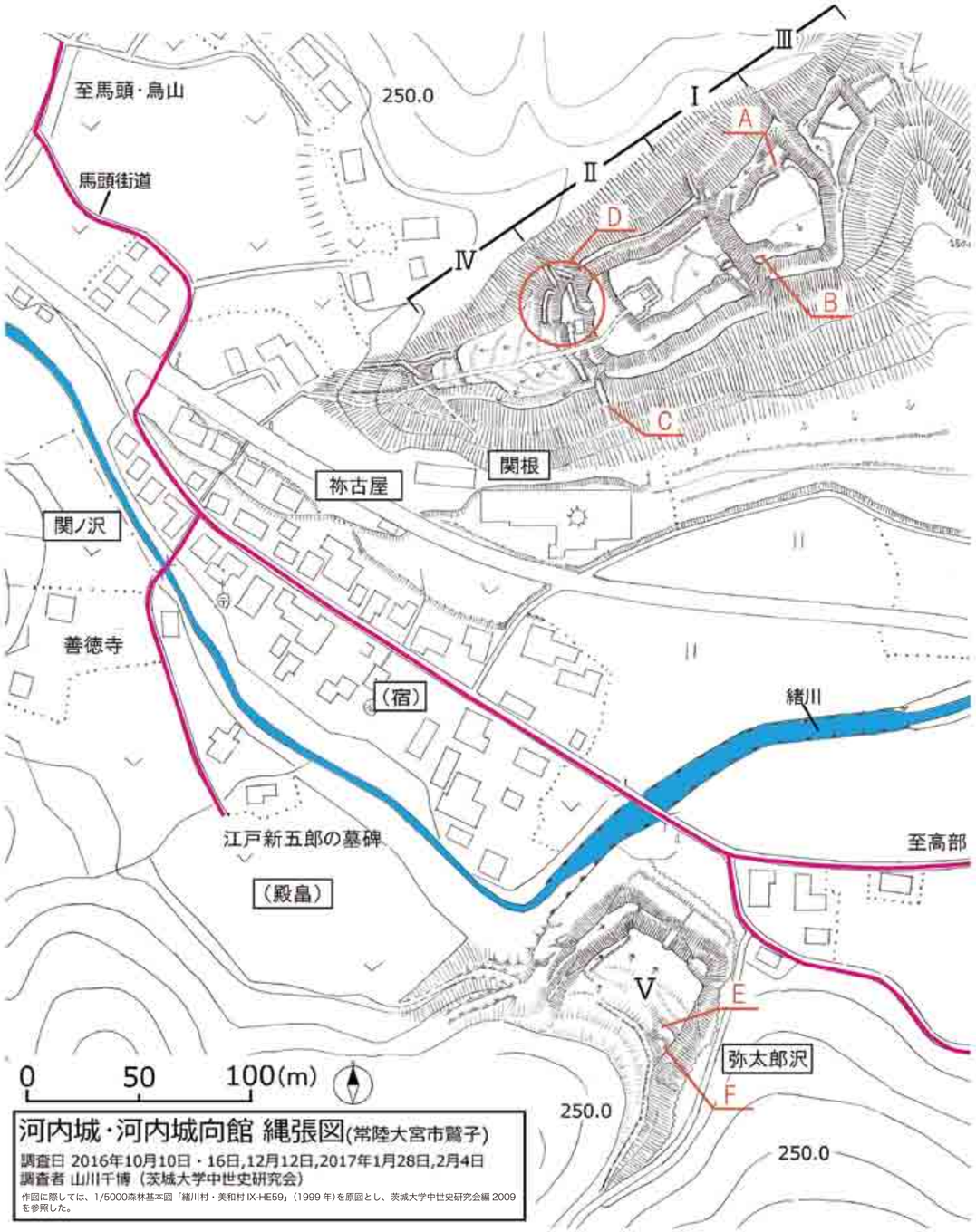
①

②

③

④

⑤



⑧

⑦

⑥

河内城向館の構造

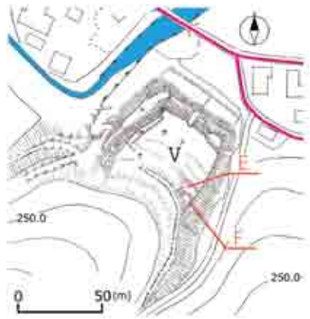
鷲子宿の東端、緒川の対岸には、地元で「向館」（むかいだて）と呼ばれる山があります。美和地区では、本城に付随する近隣地の小さな砦のことを向館と呼び、現在までに四か所が知られており、ここもその一つです〔小野　一九九三〕。

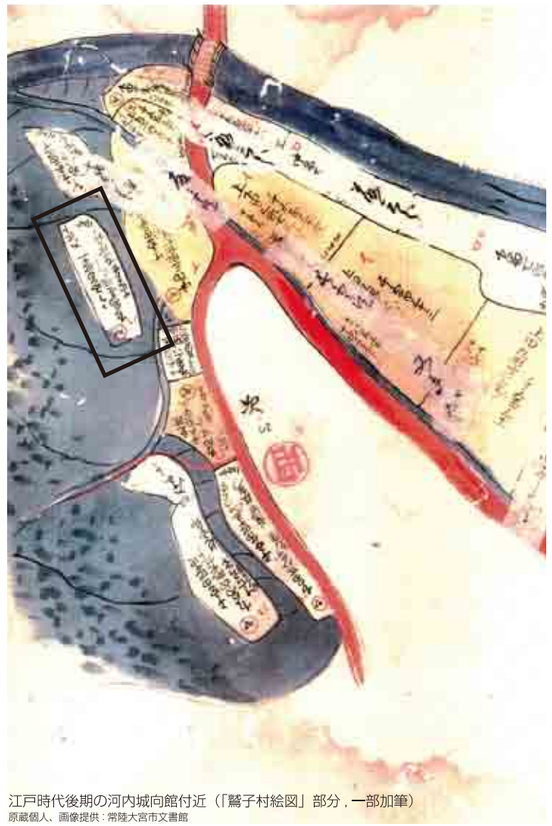
河内城向館は、緒川に向って突き出した山の先端部（標高二三〇m付近）に位置します。上部には約五〇m四方の平場（図中V）があるのみで、南側の背面は山頂に向かう尾根が続きますが、遺構は全くみられません。

果たしてVは曲輪なのでしょうか。現地に残る墓石（図中E）や氏神（図中F）、善徳寺の過去帳などから、Vには明治期に人が住んでいたことが確認できます。また「鷲子村絵図」にも畑地として描かれていることから、少なくともその頃には平坦面が作られていたことがわかります（左下図□部分）。周辺斜面は切岸となっており（写真⑨）、北東部下方に腰曲輪、北辺中央部に竪堀状の地形の落ち込み、また西辺には土塁状の高まりも見られます。さらに、Vの西側下方には、緒川に向けて通路や帯曲輪が展開します。決め手は無いものの、これらの状況証拠に、地元に残る向館伝承を加えると、Vを城郭遺構と判断して良いでしょう。

さて、向館唯一の曲輪であるVは、山の先端の最低所にあり、防御には適しません。むしろ向館の機能は、本城（河内城）との関係性に求めるべきでしょう。対岸の河内城は、佐竹氏領の西端を守る城として、那須方面からの侵攻に備えています。しかし、河内城の北西方向には同様の山並みが続くため、その主郭から西方を見通すことができません。つまり緒川の対岸に向館を築くことで、西方に対する眺望が初めて開けるのです（写真⑩）。

このように河内城向館は、監視の目的に特化した城郭のため、単郭構造で、しかも背後を一切守らず、それでも十分に機能を果たせたのだと考えられます。





江戸時代後期の河内城向館付近（「鷲子村絵図」部分，一部加筆）
原蔵個人、画像提供：常陸大宮市文書館

⑨

⑩

四、鷲子宿と周辺の文化遺産

河内〝城下〟鷲子宿

河内城の南麓には、緒川に沿い鷲子宿が展開します。江戸時代後期の「鷲子村絵図」には、短冊形に整備された商工業者の町場が描かれており、これは戦国期の町場を踏襲していると考えられます。鷲子宿は鷲子江戸氏により、下野国と常陸国とを結ぶ馬頭街道沿いの、重要な経済基盤として城下に包摂されていたと考えらます。

また、河内城と鷲子宿とのあいだには小字地名として「祢古屋」が残っており、これは城主や家臣団の居住空間、あるいは軍勢の駐屯地という意味をもつ「根小屋」の転訛と考えられます。河内城とその城下では、戦国期特有の、根小屋を媒介にした宿の保護・管理が、領主鷲子江戸氏によってなされていたのです。そして、宿を囲み蛇行する緒川を天然の外堀とし、河内城を核にして小規模ながら「惣構」を作り出していたと思われます。

このように、戦国時代の空間を今も映し出す貴重な地域として、河内城および鷲子宿周辺を位置づけることができます。

江戸時代後期の鷲子宿（「鷲子村絵図」）
原蔵個人、画像提供：常陸大宮市文書館

茨城大学中世史研究会編 2009 の上に、宿の風景写真を重ねて示した。

善徳寺

善徳寺は、鷲子宿から緒川を渡った先にある、浄土真宗本願寺派の寺院です。開山は佐竹一族の南酒出六郎義茂です。義茂は出家して善念と名乗り、親鸞二十四輩（親鸞に直接教えを受けた関東の弟子）の一人に名を連ねました〔高村　二〇一三〕。善念は、建保元年（一二一三）頃に南酒出（那珂市）に堂宇を創建し善徳寺と号しました。

その後、同寺は正和三年（一三一四）に現在地へと移転しました。その理由は不明ながら、鎌倉末期から南北朝期にかけて、佐竹一族がこの地域に進出したことに関連するかもしれません。

なお、本堂は寛永七年（一六三〇）に再建され、現在、常陸大宮市指定文化財となっています。

江戸時代後期の善徳寺境内（「鷲子村絵図」部分）原蔵個人、画像提供：常陸大宮市文書館

善徳寺山門

鷲子山上神社

鷲子山上（さんじょう）神社は、常陸国那珂郡と下野国那須郡との境界の鷲子山上に鎮座する神社で、社伝では大同二年（八〇七）創建とされます。同社の祭神は、製紙の神として常陸国や下野国で広く信仰されてきました。

南北朝期には、佐竹義高が鷲子別当となっており、この頃から佐竹氏の影響力がこの地に及んでいたとされます〔小野　一九九三〕。また先述の資料を含む、武茂氏と江戸氏に関する中世の棟札三点が、この鷲子山上神社に所蔵されており、そのうち、天文二一（一五五二）の社殿再興の際の棟札は、栃木県指定文化財となっています。

鷲子山上神社鳥居

鷲子山上神社本殿組物

鷲子山上神社本殿

五、森と地域の調和を考える会の取り組み

平成二四年四月、美和地域の衰退に危機感を持ち、「森と地域の調和を考える会」（以下「当会」）を結成しました。それ以来、「地域主体（地域の力）による地域活性化」を目標に掲げ、さまざまな活動に取り組んでおります。

当会の活動コンセプトは、「地域資源を活かした地域活性化」です。この地域にある豊かな自然や日本の原風景・里山、地域に残る歴史文化遺産などを、地域特有の宝と位置づけ、またそれらを活用し、過疎地域の活性化を目指しています。

これまでの活動では、①森林資源を利活用し、森林荒廃対策と商業活性化を図る「木の駅プロジェクト美和」を中心に、②広葉樹を活用した「美和の薪」製造販売事業、③子どもたちへの森林教室、④地域内の古い町並みの保存・整備事業、⑤地域の魅力を発掘・発信する歴史探索ツアー、⑥中世城郭の整備事業と、さまざまな事業・イベントを実施して参りました。

なかでも本書に関わる⑥では、当地域に点在する七つの山城と四つの向館の遺構を、未来に継承する文化遺産（宝もの）として位置づけ、平成二五年六月から活動を継続しています。今年度は、あらたに河内城・河内城向館を整備し、戦国時代の風景が残る貴重な地域を紹介するため、本書を作製しました。

当会の諸事業を通じて、地元の方々が、自分たちの暮らすこの場所の歴史的価値を見直し、また地域外の方々にも、この地域に関心を持っていただく機会になれば幸いと考えております。

① 木の駅プロジェクト美和

② 薪製造販売事業

③ 森林教室（間伐体験）／美和小学校

④ 岡山邸庭園（養浩園）整備

⑤ 歴史探索ツアー

⑥ 中世城郭整備事業

森と地域の調和を考える会

龍﨑 眞一　川野 和彦　大森 豊　堀江 克己　河西 和文　薄井 均　清水 浩　大高 泰弘

【参考・引用文献一覧】（年代順）

・藤木久志『常陸の江戸氏』（萩原龍夫編『江戸氏の研究』名著出版、一九七七年）
・吉田正幸「永正期における宇都宮氏の動向」（江田郁夫編『中世関東武士の研究四下野宇都宮氏』戎光祥出版、二〇一二年、初出：一九八七年）
・小野関雄「戦国時代の佐竹氏の発展」（美和村史編さん委員会編『美和村史』一九九三年）
・小野関雄「城と館の構築」（美和村史編さん委員会編『美和村史』一九九三年）
・今井雅晴「神祇信仰と神社」（美和村史編さん委員会編『美和村史』一九九三年）
・今井雅晴「仏教と寺院」（美和村史編さん委員会編『美和村史』一九九三年）
・美和村史編さん委員会編『美和村史料近世村絵図』一九九六年
・南秀利「江戸氏の発展」（内原町史編さん員会『内原町史　通史編』一九九六年）
・余湖浩一「高部城・小舟城・河内城」（茨城城郭研究会『図説茨城の城郭』国書刊行会、二〇〇六年）
・茨城大学中世史研究会編『河内館跡とその周辺』（茨城大学五浦美術文化研究所、二〇〇九年）
・茨城大学中世史研究会・常陸大宮市歴史民俗資料館（大宮館）編『館（たて）と宿（しゅく）の中世―常陸大宮の城跡とその周辺―』常陸大宮市、二〇〇九年
・高橋修「河内館跡とその周辺―土豪の城の風景―」（常陸大宮市・茨城大学地域連携事業シンポジウム「よみがえる戦国の城」報告レジュメ、二〇〇九年一一月一日）
・梅田由子「常陸大宮市域の中世銘文史料―棟札を中心に―」（『茨城大学中世史研究』七、二〇一〇年）
・高村恵美「常陸大宮市内における佐竹氏所縁の開基仏像」（『常総中世史研究』一、二〇一三年）
・常陸大宮市歴史民俗資料館編『常陸大宮　ふるさと見て歩き』常陸大宮市教育委員会、二〇一四年
・森と地域の調和を考える会編『戦国時代の山城跡　高部館』同、二〇一四年
・山川千博編『中世の高部―戦国時代の山城高部館・向館、そして城下を受け継ぐ高部宿の姿を探る―』（森と地域の調和を考える会、二〇一六年）
・前川辰徳「佐竹氏と下野の武士」（『佐竹一族の中世』高志書院、二〇一七年）